

ひかりのこ

5月園便り

聖ミカエル幼稚園
2017年4月21日

月主題：見つける

『言葉で育つ』

「『魔法の言葉』」ずっと、ずっと大昔 人と動物がともにこの世に住んでいたとき なりたいたいと思えば人が動物になれたし 動物が人にもなれた。だから時には人だったり、時には動物だったり、互に区別はなかったのだ。そしてみんながおなじことばをしゃべっていた。その時ことばは、みな魔法のことばで、人の頭は、不思議な力をもっていた。ぐうぜん口について出たことばが不思議な結果をおこすことがあった。ことばは急に生命をもちだし 人が望んだことがほんとにおこった--- したいことを、ただ口に出して言えばよかった。なぜそんなことができたのか だれにも説明できなかった。世界はただ、そういうふうになっていたのだ。

これは、私が中学校国語の教員だった時、教科書に載っていて、授業で使った詩です。エスキモー族に伝わる詩で、とても不思議な感じがしたのを覚えています。中学生の言葉は、ある時はとても繊細ですが、ある時はとても雑になります。友達としゃべるときには、相手の気持ちを考えて言葉を選ぶことができるのですが、ラインやメールになると、時には相手を傷つける言葉や、汚い言葉を使ってしまいます。携帯が普及してから、ラインやメールによるいじめが、よく生徒指導で問題にされるようになりました。中学生の子どもたちとこの詩を読みながら、「やっぱり言葉は大切だね。今だって、言葉によって傷つく人もいれば、生きる勇気をもたらす人もいるものね。口や文章で発する言葉は、もっと考えなくちゃいけないよね。」と話したものです。

聖ミカエル幼稚園に、今年もかわいらしい年少さんが入園しました。まだまだこれからたくさんのお話を吸収して大きくなっていく子どもたちです。幼児期の子どもにとって言葉の獲得は、成長のために大変重要な位置を占めます。言葉があるからこそ、他人とコミュニケーションが取れるのです。それだけではありません。心の中で考える時にも、「言葉」が必要になります。言葉を獲得しないと、自分の考えを持つこともできなくなるのです。そ

してその言葉は、お母さんやお父さんや、幼稚園の先生から日々吸収していくのです。そう考えると、私たち大人は、この子どもたちに対して、細心の注意を払ってできるだけ良い言葉を与えていかなければいけません。「きもい」「死ぬ」などは絶対聞かせるべきではない言葉です。子どもを取り囲む私たち大人は、子どもの将来にも大きな責任があることを肝に銘じなければなりません。

園長 渡部 良子

キリスト教保育

「暗唱聖句」

「天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げた。」

聖ミカエル幼稚園は、こどもたちと先生が、毎月違う聖書の言葉を覚えて唱えています。これを暗唱聖句といいます。私たちにはそれぞれ「座右の銘」や、誰かの忘れられない一言があるものです。聞いた時にはそれほど印象がなくても、時間が経つと、しみじみと思い出される言葉があります。そういう言葉によって、人間は支えられ、大切なことを学びます。幼稚園でも、聖書の言葉にはすべての人に共通する普遍的な価値があると考えています。こどもたちも聖書の言葉に触れることによって、人生の糧にして欲しいと願っています。

4月の聖句は、イエス様の復活に関する言葉です。十字架につけられ死んだはずのイエス様ですが、女性たちが墓を見に行くと天使が現れ、「生きています」と告げるのです。この出来事を、あり得ないと笑うこともできますし、そのまま信じることもできます。今までの私の経験から言うと、人生でいろいろな苦しいことを経験すると、だんだんイエス様の復活の意味が分かってくる、復活したことに感謝したくなる、そして自然に信じられるようになる、ということがあるようです。何かと時間がかかる私たちです。すぐに結論を出さず、保留してじっくり自分と付き合わせて吟味する、聖書の言葉はそういう読み方がふさわしいのかも知れません。

チャプレン 司祭 下澤 昌